

卷頭言
論 說

研究の再構築

『史記』日者列伝と漢代「日書」の関係に関する再検討

王景創 (柿沼陽平訳)

飯山 知保

李鴻章の丁憂と帰任再考

柏 天野

中華民国時期江蘇省南通県金沙鎮における農村経済の発展

——頭総廟を例として——

弁納 才一

翻訳論説

古代中華帝国形成期における財政の変容

マキシム・コロルコフ
(柿沼陽平訳)

——前四世紀後半から前一世紀を中心に——(下)

79

森林之子 林光演先生訪問記録

蕭慧琴・陳淑容(弁納 才一訳)

訳 注

『慈漢黄氏日抄分類』申明訳注その五

卷七二 申明三 第三任分司鎮江條陳轉般倉事(上)

宋代史ゼミナール

紀行文

金牛道広元・梓潼段沿線三国関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹

河南省許昌市三国志関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・平林優一

二〇二五年朝鮮古代遺跡踏査記

韓相賢・福島理生・森田大智
笠井雄元・小川清香・油屋凜々香

陝西省南部・甘肅省南部秦漢三国史跡等踏査記

加計翔成・斎藤賢
新津健一郎・峰雪幸人

二〇二五年夏渤海国史跡調査紀行

王一嘯・栗林聡・盛嘉

——上京城址・敖東城址・六頂山墓葬・中京城址・鴻臚井の碑——

平林 優一

野中 敬

新刊紹介
追悼文
彙 報

293

289

287

261

225

193

163

139

95

79

67

45

21

2

1

河南省許昌市三国志関連遺跡調査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・平林優一

はじめに

二〇二五年四月二六日～二八日、柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・平林優一の四名は、河南省許昌市周辺の三国志関連遺跡を踏査し(図1)、現地の博物館で関連史料を見学した。

許昌市は後漢末、群雄割拠の時代に曹操が本拠を置いた地の一つで、後漢最後の都(一九六～二二〇年)として漢魏交替の舞台となった¹⁾。許昌を主題として扱う研究は多くない²⁾。原因の一端は、許昌が国都だった期間が短く、関連情報が長安・洛陽に比して少なく、漢魏許都故城の正式な報告書も未刊だからであろう。そこで本稿では、許昌とその周辺の所謂三国志関連遺跡(後代に造られたものもある³⁾)を踏査し、当地の三国志関連の伝承について検討する⁴⁾。

四月二六日(土)(図2)

八時四二分、北京西駅でG五〇一に全員乗車。一二時五五分、許昌東駅到着。一三時一六分、王博がレンタカー確保。

一三時四〇分、董妃墓(34°02'31.0"N 113°50'57.3"E)到着(図3)。二〇〇六年に許昌市東城区が一带を貴妃苑として整備した。董妃墓前の「董妃墓」碑(二〇一二年建立。許昌市級文物保護単位)によると、董妃墓は尚家村漢墓ともいう。その高さは約一〇m、全周は八〇m、面積は五〇〇m²余⁵⁾。張淑霞によると、墓室は墓冢の東縁にあり、一九九〇年代初頭に盗掘されると、墓門は東向きで、墓道が二本ある。墓室は長方形で、耳室が南北に一つずつ、西側に二つある。墓壁・墓頂は「五」字形や楔形の磚製で、接着剤は不使用。墓門は未開封で、門楣や門扉の画像の有無等は不明だが、左墓門には



图1 許昌市周边图



图2 初日踏查地点（魏都区）



図3 董妃墓



図4 萬歲磚

鶴を刻した鋪首銜環がある。⁽⁵⁾夏侯淵墓の撮影協力者(後出)によると、約三〇年前にはたしかに盗掘坑があったとか。貴妃苑隣のホテル職員によれば、董妃墓は当地では有名で、以前は尚姓の人々の村落があり、董妃墓は村の西に位置したため、尚家村漢墓ともよばれているという。だが『中国文物地図集・河南分冊』(一九九一年刊)尚家村漢墓条は董妃墓説に触れておらず、⁽⁶⁾地方志にも董妃墓に関する記述は見当たらない。

昼食後、一四時四二分、許昌博物館見学。同館は河南省博

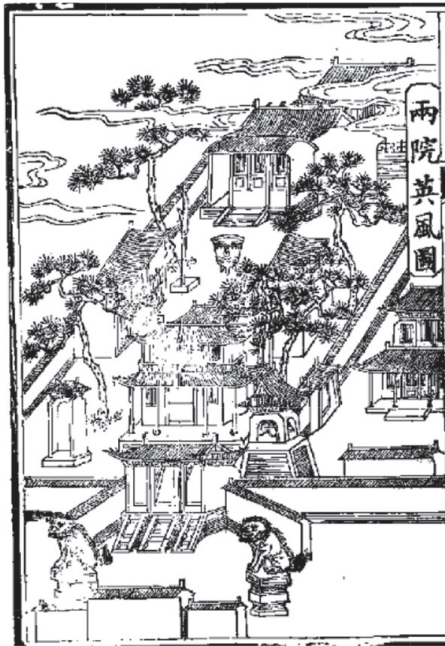


図6 兩院英風園（『乾隆』許州志）
目録）



図5 石辟邪

博物院に属し、河南省博物院許昌分院ともよばれる。「曹魏許都」等の展示があり、画像石・鉄器・陶器等があった。⁽⁸⁾「騎部曲將印」・「萬歲磚」等の漢魏許都故城出土文物や（図4）、三国志関連遺跡等の紹介・地図が含まれる。また「石辟邪」があり（図5）、館内説明文によると、二〇〇五年襄城県潁陽鎮出土で、とくに王霸墓（後述）出土とする説もある。⁽⁹⁾

一六時〇三分、春秋楼（34°01'39.9"N 113°49'20.2"E、成人一人二五元）到着。全国重点文物保护单位「許昌文廟（含春秋楼）」碑（二〇一九年建立）がある。許昌市文化局によると、関公宅・関帝廟などとも呼ばれ、創建は元・至元年間。清代に至るまで幾度となく修復されてきたが、戦火により春秋楼のみ現存する。一九九五年に許昌市政府らが「兩院英風」の配置に修復した（図6）。境内には春秋楼や関聖殿（図7）・問安亭・甘糜二后宮などがある。春秋楼は大節亭とも呼ばれ、関羽が『春秋』を本楼で読んだとい⁽¹⁰⁾う。なお、元・趙孟頫「關王廟碑」（春秋楼蔵）拓本によると、春秋楼は元・至和年間に大規模に拡張されている。また境内の解説文によると、関羽が劉備の妻二人を伴って許昌に滞在した際、曹操より下賜された邸宅である。清・雍正年間には五大関廟にも列せられた。主要建築の「関聖殿」は高さ三三・一mで、室内の関公坐像は高さ一五mに及ぶとか。許昌文廟は、許昌市文化局によると唐・開成元年（八三六）創建で、もともと許昌城の東南隅にあったが、金代に現在の地に移された。こちらも元



図7 関聖殿

清代にかけて修復・拡張され、現在の構造となった。一九九五年には許昌市政府らが全面的に修復している。⁽¹¹⁾ 実際に景区内を調査すると、明・万曆二七年（一五九九年）建「關羽勒馬挺風図」碑、明・景泰六年（一四五五年）建「關王辞曹操

之図」碑など、⁽¹²⁾ 明清期の碑もある。王重陽・王芳は春秋楼・許昌文廟について、①関羽の不屈の精神や「忠貞不二」の人格を強調したもので、②一宅両院は他の関帝廟にみえず、③文廟（許昌文廟）と武廟（春秋楼）が隣接する珍しい形式だとする。⁽¹³⁾ 春秋楼の文物は目下、景区開発に伴って許昌博物館に収蔵されている。⁽¹⁴⁾

一六時四三分、曹魏古城区内の曹丞相府（ $34^{\circ}02'00.4''N$ $113^{\circ}49'16.1''E$ ）に到着。「許州府衙」碑（河南省級文物保護単位）がある。曹操の執務室跡に景区を作ったとされるが、⁽¹⁵⁾ 真偽不明。丞相府前には巨大な曹操像があり（図8）、現地解説文によると中国最大とか。⁽¹⁶⁾ 景区右側にも「丞相府」の入口があったが、時間の関係で見学せず。許昌市文化局によると、許昌府衙は漢〜現中国初期まで官署の所在地であった。二〇〇七年には魏武帝広場（曹丞相府）の建設に伴い発掘が行われ、宋代以降の遺構が発掘されている。⁽¹⁷⁾

一七時二五分、瀟陵橋（ $34^{\circ}01'15.0''N$ $113^{\circ}46'45.8''E$ 、成人一人三〇元）に到着（図9）。馬宝記・杜永青両氏によると、またの名を八里橋ともいい、⁽¹⁸⁾ 『嘉靖』許州志「八里橋条に「在州西八里相傳爲曹操送關羽之所」とあり、関羽が曹操のもとを辞して劉備のもとへ戻った故事に由来するとか。原「瀟陵橋」は一九六二年に洪水で崩壊し、我々のみた現在の橋は一九八〇年代造である。⁽¹⁹⁾ もとの橋の上には、本故事をモチーフとする呉道子の絵画を刻んだ碑（明嘉靖期）や、明末・左良



図9 灞陵橋



図8 曹操像

玉「漢關帝挑袍處」碑があったらしい。一九九〇年に原「灞陵橋」の発掘調査が行われた際、実際に前掲左良玉「漢關帝挑袍處」碑が発見されたという⁽²⁰⁾。現在の橋の前には関羽騎馬像があったほか、橋を渡った先には、関羽が五つの関を突破した故事にまつわる「始出五関」と題する門があった。同景区には許昌関帝廟もあるが、一七時閉門のため見学不可だった。その門前の「許昌関帝廟」碑（二〇一三年建立。全国重点文物保护单位）によると、当該廟は清・康熙二八年（一六八九年）造で、八大関帝廟の一つに数えられ、敷地は六八六四㎡余に及ぶという⁽²¹⁾。

一八時一六分、夏侯淵墓（34°01'38.0"N 113°45'27.7"E）附近に到着。なかなか見つからず、中国石化の石油タンク区画内にあるとの情報を手に入れて向かったが、関係者以外立ち入り不可で、やむなく中国石化の事務員に頼んで墓影を代わりに撮影いただいた（図10）。墓前には「夏侯淵墓」碑（二〇一二年建立。許昌市級文物保护单位）がみえる。『許昌県志（一九八六〜二〇〇〇）』によれば、本来は夏侯淵墓東側に夏侯惇墓もあったが、すでに破壊されている。夏侯淵は陽平関で戦死したが、曹操が遺体をここに運んだとか⁽²²⁾。夏侯淵墓・夏侯惇墓の伝承は民国期に遡るが、当ても墓碑等はなかったようである⁽²³⁾。なお明代地方志には、夏侯淵墓は現在の陝西省涇陽県にあったともある⁽²⁴⁾。

一八時五四分、鼉錯墓（34°01'45.5"N 113°50'02.6"E）到着（図



図10 夏侯淵墓

11)。墓前に「鼂錯墓」碑（二〇一二年建立。許昌市級文物保護單位）がある。許昌市文化局によると、許昌市烈士陵園内の西北隅にあり、『嘉靖』許州志』卷八雜述志鼂錯墓条に「在州城東一里」とあり、墓冢は高さ約一〇m、面積約三三六㎡で、墓前には「漢御史大夫鼂公之墓」碑（一七三八年建立）があるという²⁵⁾。ただし、前述の「鼂錯墓」碑には、高さ



図11 鼂錯墓

五m、全周六〇m、面積三〇〇m²余とあり、高さが半分となっている。また古くは現地の人に「忠義冢」とも呼ばれたとい⁽²⁶⁾う。『許昌県志（一九八六〜二〇〇〇）』によれば、墓の保存状態は一九五〇年代には良好だったが、一九六〇年代には盗掘のせいで墓券が露出していた。墓門は東向きで、墓室は南北にあるとい⁽²⁷⁾う。また『許昌市魏都区志』によれば、本墓は元代以降たびたび修築されてきたが盗掘に遭い、一九七四年に国によって修復された。⁽²⁸⁾元代修築説の根拠は不明だが、李賢『大明一統志』巻二六河南布政司鼂錯墓条に「在許州城東三里」とあり、明代にあったのは确实（前掲『嘉靖』許州志）と距離は異なる）。

二〇時一四分、航覽朝鮮族飯店（金匯広場店）で夕食後、麗楓酒店泊。

四月二十七日（日）（図12）

九時一〇分頃にホテルのロビーに集合、一〇時〇一分に王霸墓（33°54'36.1"N 113°44'00.2"E）附近に到着。保護碑等の標識はない。数名の現地民に聞いても不明で、村の入口まで戻ったところ、道を知る老翁に会えた。王霸墓は村の北のほ⁽²⁹⁾ずれにあるとされるが（図13）、墓らしい痕跡はない。老翁によると、一九五八年頃に発掘が行われ、墓中の遺物（石獸を含む）は許昌市の文物局に収集された。当時は付近に四つ⁽³⁰⁾の漢墓があり、四王塚とよばれ、墓主は王霸と後裔三人（王

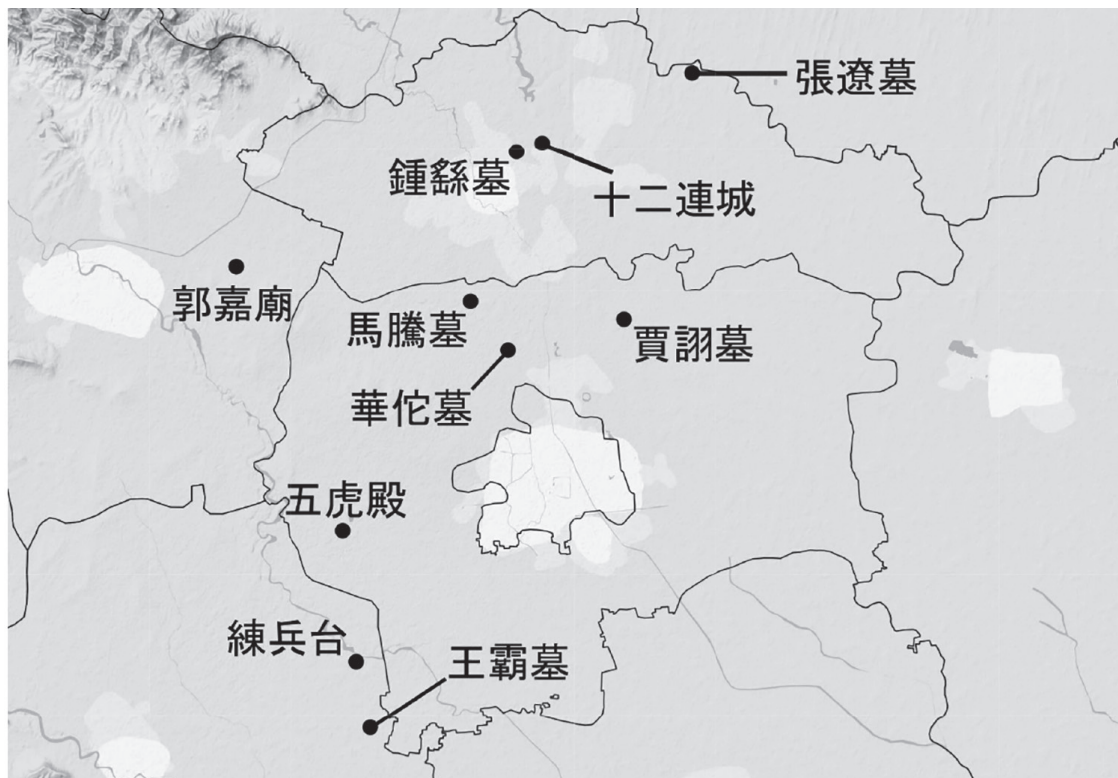


図12 2日目踏査地点



図13 王霸墓

符・王度・王歆」とされ、王英なる子孫もいたという。調べてみると、後漢・雲台二十八将に列する潁陽侯祭遵・昆陽侯傅俊・富波侯王霸・合肥侯堅鐔の墓とする説があり、民国期に王霸墓説は生じている。⁽²⁹⁾ 王霸は『後漢書』卷二〇王霸列伝「王霸字元伯、潁川潁陽人也」によれば、本墓周辺の出身だが、没した場所は記載がない。王霸墓の伝承は河北省臨城県、河南省商水県等にも残る。⁽³²⁾

一一時〇六分、曹操練兵台 (33°52'23.9"N 113°40'26.0"E) に到着 (図14)。付近には「台王遺址」碑 (襄城県省級文物保护单位) がある。発掘簡報によると、台王遺址は四つの文化層に分かれ、第一層が竜山文化早期、第二・三・四層は竜山文化中期に属し、ほかにも戦国期の墓葬二基が確認できたという。⁽³³⁾ 台地上には計五棟の建物があり、後漢末・楊脩の廟がある他 (図15)、関羽の絵もあった。史友仁等によると、楊脩が友人の郭嘉をこの地で弔ったため、後世の人が楊脩廟を建てた。楊脩廟 (俗称楊爺廟) には元来山門・大殿もあった。⁽³⁴⁾ 襄城県人民政府によると、一九七七年に張繡に敗れた曹操が、水陸の便の良い当地に練兵台を造営したとか。⁽³⁵⁾

一一時三四分、五虎殿 (33°34'52.9"N 113°39'44.6"E) に到着。門前には「五虎殿」碑 (許昌市級文物保护单位) がある。五虎殿は清代の建築で、もともと孔子が列国を周遊した際、当地を訪れたことを記念する廟であった。後に、五虎將軍の廟となったという。⁽³⁶⁾ 門は施錠されていたが (図16)、管理人が



図14 曹操練兵台

いて見学を許された。管理人によれば、五虎廟の創建は明代（二五〇〇年頃）で、現存建築は清代のもの。文革以前から五虎將軍像はあり、廟自体は学校として使用されていた。現存五虎將軍像は二〇〇二年造。廟内に複数の碑がある他、門前にも倒壊した碑や石羊がある⁽¹⁷⁾。

一二時三二分、赤眉城遺跡（34°00'01.6"N 113°39'11.0"E）到着（図18）。入口の「赤眉城遺址」碑（二〇〇五年建立。許昌県重点文物保護単位）によると、赤眉の乱のときに樊崇が建てた城で、俗称は紅土寨。元来亭・台・楼・閣・山神廟等があったという。当地は熊耳山ともよばれ、⁽³⁸⁾附近に「許靈山」と記された碑もあった。一帯は高さ五mほどの盛り土に囲まれ、「崇徳宮」なる建物がある。『後漢書』卷一一劉玄劉



図15 楊脩像

盆子列伝「崇・安攻拔長社、南擊宛、斬縣令」、〔康熙〕許州志』卷七人物志下「新莽時、羣盜竝起。有赤眉賊樊崇、流聚熊耳山旁、剽至許」によれば、清代には許昌の熊耳山と樊崇を結びつける説話があった。

一三時五九分、郭嘉廟 (34°10'20.2"N 113°34'09.9"E) に到着。廟には「郭東村郭嘉祠堂遺址」標識 (二〇一五年。禹州市不可移動文物) がある。廟は施錠されていたが、横の緑駒



図16 五虎殿

電動車従業員が解錠してくれた。廟横には石獅子がある他、中には貞侯郭嘉像 (図19)、「郭氏」碑等がある。郭連郷は郭嘉の故里とされ、その名前も郭嘉に由来する⁽³⁹⁾。

一四時二二分、順店雑烮豆腐菜で昼食。一五時三一分、馬騰墓 (34°08'57.2"N 113°45'05.0"E) 到着 (図20)。墓前には「馬騰墓」碑 (二〇一八年建立。許昌市級文物保護單位) と「馬騰墓」碑 (二〇一二年建立。許昌県級文物保護單位) がある。墓冢は楕円形で高さ六m、一〇〇〇m⁽⁴⁰⁾。また墓前には世界馬氏聯誼總會等による「漢故衛尉槐里侯扶風馬公諱騰字寿成之墓」碑 (二〇二四年建立) もある。馬宝記・杜永青によれば、許昌の馬騰墓には本来、許昌の墓守がおり、のちに彼らが村落を作り、一带は「冢許」とよばれるようになったという⁽⁴¹⁾。



図17 石羊



図18 赤眉城遺址外観

なお周辺の壁には、三国志の登場人物の絵図があった。

六時〇二分、華佗墓(34。

0703.7°N 113。4647.8"E) に

到着。入口に許昌市建安區華

佗文化研究会の看板があり、

右手に華佗文化研究会の紹介、

手前に「神医華公像」、奥に

華佗墓がある(図21)。墓前

には「華佗墓」碑(二〇一二

年建立。河南省級文物保護單

位)がある。墓冢は高さ四m、

三六〇㎡余の円形で、一七五

二年に近隣の儒者や医者が出

資して石碑を建てた⁽⁴²⁾。解説文

によると、一九八〇年に許昌

県級文物保護單位となり、一九九三年に市級、二〇〇八年に

河南省級に登録されたという。馬宝記・杜永青によれば、付

近には溱沔村があつて華佗を祭り、それは哭佗村からの転音

で、華佗の妻子が当地で大いに哭したという伝承に由来する

という⁽⁴³⁾。なお華佗墓は江蘇省徐州市付近や、陝西省華陰市付

近にもあつたと伝わる⁽⁴⁵⁾。

一六時五一分、賈詡墓(34°08'14.4"N 113°52'15.7"E) に到



図19 郭嘉像

着(図22)。附近に「賈詡墓」碑(許昌市建安區級文物保護單位)がある。墓冢は元來高さ一〇m、三三〇〇㎡だったが、文革期(解説文によると七〇年代)に破壊され、石墓門・門楣・五銖錢等が持ち出された⁽⁴⁶⁾。解説文によると、石墓門の中心に鋪首銜環、門楣に二虎相闘の図が刻まれていたとか。我々がみたところ、付近には何もなく、見渡す限り農地だった。賈詡墓上には元來亭閣・回廊があつたという⁽⁴⁷⁾。賈詡墓出土の石墓門は現在、許昌博物院所蔵とされる⁽⁴⁸⁾。また『乾隆)許府志』卷一〇古蹟賈詡談兵処条に「在州北蔣馬鋪」とあり、周辺には賈詡にまつわる地があつた。



図20 馬騰墓

一七時四〇分、鍾繇墓・鍾会墓(34.1447.6°N 113.4714.5°E)に到着(図23)。墓前には台湾区鍾姓全体裔孫が一九九一年に建立した碑があり、附近には「鍾繇陵園」と記



図21 華佗墓

された門があるが、一帯は荒廃しており、整備された様子はない。門からみて左奥に鍾会墓、右奥に鍾繇墓があった。墓冢付近に文物保護碑などは確認できなかったが、『長葛市志』によれば、一九九四年に長葛市文物保護単位に登録されている⁽⁵⁰⁾。鍾繇墓については、伝世文献に多くの記述がある。西晋・衛鑠『衛夫人筆陣図』王右軍題衛夫人筆陣図後に「翼先來書惡、晋太康中有人於許下破鍾繇墓、遂得筆」とあり、西晋の



図22 賈詡墓

頃には許昌周辺に鍾繇墓があり、すでに暴かれていたという。また『太平寰宇記』巻一河南道一尉氏県城に「故鍾城在縣西北三十五里。按、『續述征記』云「鍾城魏太傅鍾繇故里。城南三里鍾繇碑」」、同卷七河南道七長葛県条に「鍾繇臺在縣西十里。魏東武亭侯鍾繇學書臺、在繇故宅中。今臺址尚存、又有鍾繇冢」とあり、鍾城・鍾繇碑・鍾繇台に関する記述も見える。⁽³¹⁾ 以上の記述から、馬宝記・杜永青両氏は鍾城が長葛県にあったのは間違いない、その中に鍾繇墓もあったとする。⁽³²⁾

一八時一〇分、十二連城 (34°15'08.3"N 113°48'24.0"E) に



図23 鍾繇墓

到着 (図24)。遺跡の前には「十二連城」碑がある。案内してくださった現地の方によると、高さは六、七m。盛り土の上の幅は三mほどで、痕跡らしきものは何も確認できなかった。我々が確認したのは一つ (おそらく轆轤湾村のもの) であったが、『長葛県志』によれば総計五つあり、五龍口近辺のものをもっとも保存状態が良いという。それによれば、高さは五・一m、底の幅は二七m、頂上の幅は一・一mほどである。⁽³³⁾ 十二連城は春秋戦国期に建築されたものを、唐代に尉遲敬徳が修築したものとの伝承があり、発掘文物の傾向とも一



図24 十二連城

致する⁽³⁴⁾。また「連城」という名称については、『(雍正) 河南通志』卷五二古蹟下十二連城条に「在長葛縣城西北五里。如環相連、故曰連城。接新鄭界」とあり、その相い連なる様子に由来するという。



図25 張遼墓

一九時〇七分、張遼墓(34°17'51.6"N 113°55'27.0"E)に着(図25)。墓前には長葛市文物保護單位「張湾漢墓」碑(二〇二一年建立)がある。それによると、墓冢は東西・南北い

ずれも五〇mという。また『長葛県志』によれば、高さ七m、面積一二〇〇m²。もともと張遼墓の上には建築物があったといい、周辺からは漢代の瓦・陶片が発見されている。⁽⁵⁵⁾ 本来はほかに陳寔墓・射鹿台・三里冢（伝曹彰墓）も踏査する予定であったが、王霸墓踏査に時間をかけたこともあり、一七時一〇分頃に断念した。

二〇時三二分、ホテル付近の楊掌櫃辣椒炒肉にて夕食の後、解散。

四月二十八日（月）（図26）

八時四〇分にホテルロビーに集合、チェックアウトした後、九時二二分に伏皇后墓（33°54'15.7"N 113°48'54.1"E）に到着（図27）。墓前には「伏皇后墓」碑（二〇二一年建立。河南省級文物保護単位）・「伏皇后墓」碑（二〇一二年建立。許昌市級文物保護単位）がある。高さ約一〇m、面積一七三〇m²。一九六八年に二皇子の墓が破壊され、画像石・石墓門が持ち出された。⁽⁵⁶⁾ また「伏皇后墓」碑（河南省級文物保護単位）の解説文によると、伏皇后は、曹操に背いた父・伏完に連座して自殺に追い込まれたが、その際、伏皇后所生の二皇子も殺害され、許都南苑（現在の劉莊村附近）に葬られた。墓守は劉姓で、陵墓附近はのち村となり、現在の劉莊となった。⁽⁵⁷⁾ 石墓門には朱雀・鋪首銜環が刻されていたという。馬宝記・杜永青によると、石門は劉莊村に現存するという。⁽⁵⁸⁾ 現地民によ

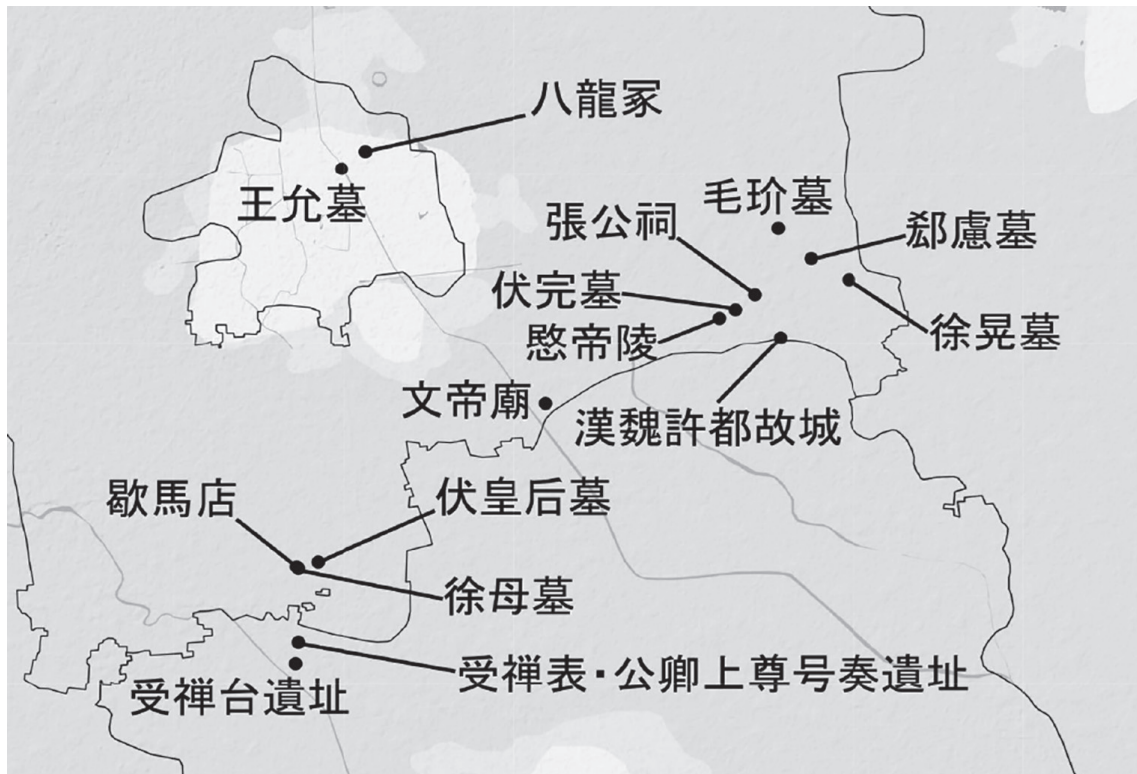


図26 3日目踏査地点



図27 伏皇后墓

ると、伏皇后墓前の廟は(図28)、一九〇〇年前から存在し、伏皇后像がある。だが盗掘を受けているという。我々がみたところ、廟前には「大仙爺神」碑(二〇〇六年建立)があり、墓冢の四方向は農地であった。

九時四三分、徐母墓(33°54'06.7"N 113°48'19.7"E)に到着。墓前には「徐母墓」碑(二〇一二年建立。許昌県級文物保護単位)と、「漢大賢徐母之墓」碑(一七五六年)⁽⁵⁹⁾がある(図29)。本墓の墓冢はほぼ平らで、面積一〇〇〇m²。一九五二年に村



図28 伏皇后廟

民が墓の東門から墓室に入ると、内部は円形、天井はアーチ状で、漢磚があり、三m余の隙間から南北二門が露出していた。しかし、一九六七年に破壊され、墓碑は劉莊学校に残るという。⁽⁶¹⁾「徐母」の由来については、『(雍正)河南通志』卷四九陵墓徐母墓条に「在州城東二十五里。徐庶母。上有碑」とあり、墓冢上の碑によるらしい。現地民によれば、文物は文物局に搬出されたという。近隣には歇馬店(33°54'09.1"N 113°48'17.4"E)があり、門前の「劉莊歇馬店」碑(二〇一八年建立。許昌市建安区級文物保護単位)によると、元来は四〇〇〇m²で、⁽⁶²⁾建築は四〇〇m²を占め、前方に山門があり、中に卷棚、拝殿、後方に大殿があった。一九六〇〜七〇年代に



図29 徐母墓

廟内の建築は破壊され、石碑六、碑額二、碑坐一つのみ現存する。うち石碑二点の保存状態は良好で、清代のものだという。境内には現地民が多く、廟の由緒等を説明してくれた。境内の保存状態はよくないが、多数の石碑があった。馬宝記・杜永青によれば、「歇馬店」の名については二つの由来がある。第一は、関羽が許昌にいた時、徐庶の母の忠烈に感じ入り、墓前で馬を繫いだとの由来。だが関羽が許昌にいた頃、徐庶

の母は自死しておらず、時系列が合わない。第二は、関羽が許昌を離れて劉備のもとに向かった際、道中で劉備が汝南にいたことを知り、汝南へと転身し、途中で馬を休めたところ、のちに現地民がそこに関羽の廟を建てたとの由来。⁽⁶³⁾ともかく万暦年間の碑がある点、万暦年間に関羽信仰が盛んになった点から、万暦年間に建立されたとする。⁽⁶⁴⁾

一〇時〇七分、受禪表・公卿上尊号奏遺跡 (33°52'26.5"N 113°48'21.3"E) に到着。附近に「受禪表・公卿上尊号奏遺址」碑 (二〇〇六年建立。中華人民共和国重点文物保护单位) がある。「受禪表」・「公卿上尊号奏」両碑はいずれも高さ二・八m、幅一・〇七m。⁽⁶⁵⁾ 碑額は篆書。碑文は隸書で、王朗の文、梁鵠の書写、鍾繇の刻石になり、故に「三絶碑」ともいう。⁽⁶⁶⁾ 遺跡は整備中で、石碑のある建物は閉鎖されていたが(図30)、両碑拓本は許昌博物館に展示されていた。近隣に受禪台遺跡 (33°51'58.0"N 113°48'15.6"E) もあり、「受禪台遺址」碑 (二〇〇六年建立。中華人民共和国重点文物保护单位) がある。受禪台は高さ一〇m、縦・横ともに七五mの方台である。本来は台上に建築物があったが、いずれも現存しない。⁽⁶⁷⁾ また現地の解説文によると、後漢・延康元年(二二〇年)の獻帝禪讓時に使用され、本来は方殿・亭・天祿・辟邪等の建築を有したが、現在は基盤のみ残るといふ。塩沢裕仁によれば、曹丕は漢朝の色彩の強い許昌城を避けて受禪台を許昌西南郊に建てたといふ。⁽⁶⁸⁾



図30 受禪表・公卿上尊号奏遺跡

一一時〇四分、魏文帝廟（33°57'50.7"N 113°54'53.8"E）に到着。門前に「魏文帝廟」（二〇一二年建立。許昌市級文物保护单位）や三曹像があり、門には「高廟」・「魏文帝廟」の額がある（図31）。廟区内の関公閣前には「魏文帝廟」（二〇〇一年建立。許昌市重点文物保护单位）がある。前者によると、これは元来曹氏の家廟だったが、⁽⁶⁹⁾太和六年（二三二）に魏の明帝がここで祭祀を行って文帝廟に改名して以降、宋代



図31 文帝廟門

に至るまで度々改修され、のち「玄帝殿」とよばれた。現在の面積は一〇畝、山門・大殿・東西の廊下、「重修魏文帝廟記」碑（一四九三年）や「創建玉皇閣」碑（一六一四年）等が残るといふ。『許昌県志（一九八六〜二〇〇〇）』によれば、本来は曹丕像があったが、明・嘉靖年間に許昌知州の于玘が廟を通り過ぎた際に、篡奪者の曹丕の祭祀を禁じ、玄帝殿となった。以後は「文帝廟」とよばず、玉皇殿と春秋閣のみ現存する。⁽⁷⁰⁾また『（嘉靖）河南通志』卷一八魏文帝廟条に「有三。一在鄆陵縣南三十里、一在許州東古城内、一在鄆城縣西凌雲保」とあり、明代の許昌周辺には文帝廟が三箇所あった。我々が実際に廟内に入ったところ、関羽を祭る関公閣があり、二



図32 愍帝陵

階には関羽像とその傍らに周倉・王甫像があった。当日は地元民が境内に集まり、昼食の麺を食べていた。

一一時四九分、道中の咱家老厨・手工麺吧で昼食。

一二時二八分、愍帝陵(33°59'49.0"N 113°59'31.4"E)に到着(図32)。墓前には「愍帝陵」碑(二〇一二年建立。許昌市級文物保護単位)がある。献帝の衣冠冢で、本来高さ二〇m、面積一万m²余りであったが、張潘公社が陵区域内に建て

られたことで、一部破壊された。高さ一〇m、長さ二二m、幅二〇mの土台のみ現存する。⁽⁷¹⁾『許昌魏都区志』によれば、愍帝陵上には元来献帝廟があったとか。⁽⁷²⁾また『許昌県志(一九八六〜二〇〇〇)』によれば献帝廟は本来文帝廟で、明・弘治年間に州守邵宝が献帝廟に改めさせたという。⁽⁷³⁾また「愍帝陵」なる名称に関しても、本来「献帝陵」だったが、邵宝が蜀漢の諡号に改めたという。⁽⁷⁴⁾墓冢前には階段があり、墓上に登れるようになっていたが、立ち入り禁止との表記があった。実際、階段の状態はよくなく、管理が行き届いていない様子であった。

一二時四五分、伏完墓(34°00'1.6"N 113°59'59.7"E)に到着。墓前の「伏完墓」碑(二〇一二年建立。許昌市級文物保護単位)によると、高さ二m、面積二畝の楕円形で、一九九五年に県級文物保護単位に登録されたという。周辺は農地で、墳丘は残るが、整備されている様子はなかった(図33)。

一二時五九分、張公祠(34°00'22.2"N 114°00'27.8"E)に到着。一帯は景区として整備され、入口右手に「漢張公祠」碑(二九九七年建立。許昌市級文物保護単位)、門前に「張公祠」碑(二〇一二年建立。許昌市級文物保護単位)がある。

『文物地図集 河南分冊』によると、創建年代は元代で、明清期に改修されている。⁽⁷⁵⁾山門には「漢張公祠」と題する額があり(図34)、景区内には張飛殿・包公殿がある。土台の高さは一五mという。⁽⁷⁶⁾当地が張飛の廟となった経緯について、当



図33 伏完墓

地は魏の官舎があつた地で、張飛もここに住んだ。⁽⁷⁷⁾ それゆえ、後人が廟を建て張飛を祀つた。しかし、清・嘉慶年間の許州知州包敏が、粗略な包公廟に対して広大な張飛廟を見、張飛廟の大きさを道理に合わないとしたため、共に祀ることにした。それゆえ、張公祠は包公廟とも呼ばれるという。また山門には四〇〇〇もの漢磚が使われているという(図35)⁽⁷⁸⁾。また山門・張公殿・包公殿以外に、明・嘉靖七年(一五二八年)や「重修漢張公祠」碑(一六八八年)もある。山門の壁には



図34 張公祠山門

「風石」「雨石」と呼ばれる石があり、張飛が許昌に来た際にもつていたものという。さらに、山門を抜けた先の三姓柏の樹上には松・柏・桧の異なる枝葉があり。劉・関・張の義兄弟がそれらの枝に馬を繋いだことからその名を得たという。⁽⁷⁹⁾ 両側の建物には、張潘村の地名や遺跡を解説する展示があつた。景区内には一八二〇年に許昌周辺で起きた地震の遺跡も



図35 山門内

あった。

一三時二六分、漢魏許都故城 (33°59'22.2"N 114°01'09.2"E) に到着⁽⁸⁰⁾。入口に「漢魏許都故城」碑 (二〇一四年建立。全国重点文物保護單位) がある。漢魏許都故城は、本来内城と外城に分かれ、内城は現在の甄莊・益李二村に、外城は九つの村にまたがる。故城の文化層は六メートルも堆積し、一九七

〇年代以来、考古発掘が進められている。それによれば、故城文化層は六mに及び、上層は漢代、中層は周代、下層は二里頭文化期に属する⁽⁸¹⁾。正式な発掘報告は出ていないようだが、趙西堯らによれば、内城遺跡は全周四五〇〇mの方形、四つの城門があり、城壁基礎は幅二二mである。城内は、東西の大道一一〇〇m、南北の大道一〇八〇mで、いずれも幅七m。また外城の遺構も約三五〇〇m発見されている⁽⁸²⁾。当地は、周代に許の国都があり、秦漢期には許県の県城があった。その後許都が造営されたが、南北朝期に破壊されたという⁽⁸³⁾。当時の遺構は、内城西南隅の毓秀台のみ現存する⁽⁸⁴⁾。現地解説文によると、一九八六年に河南省級文物保護單位に登録されたという。また馬宝記・杜永青によれば、漢磚や漢瓦、三国期の印璽・貨幣・銅鼎等々も出土し、四神青石柱の礎石 (一九八六年出土、河南博物院蔵) は国家一級文物である。故城内では漢代の井戸や鑄造所の遺跡も発掘されていると⁽⁸⁵⁾。実際に我々も入口から車で入り、数分後に毓秀台に到着した (図36)。毓秀台は、高さ一五m、面積二〇〇m²で、⁽⁸⁶⁾ 献帝の祭天遺跡である⁽⁸⁷⁾。台下には本来献帝が沐浴や齋戒、祭物を準備する建物があり、台上には祭祀場となる建物群があったと⁽⁸⁸⁾。いずれも現存しないが、ともかく台基は故城内唯一の現存建築物だという。塩沢裕仁は『宋書』卷一三「案何禎許都賦曰元正大饗壇彼西南」が毓秀台の台基と関わりとする⁽⁸⁹⁾。台前には「毛沢東游覽漢魏許都故城」碑もあった。また賈慶申は張潘故城



図36 毓秀台

村の許昌故城（漢魏許都故城か）西南隅に景福殿があったとし、やはり毓秀台付近である。台上には現在、「天爺廟」等の道教施設が建つ。

一三時五三分、徐晃墓（ $34^{\circ}00'44.0''N$ $114^{\circ}02'27.2''E$ ）到着（図37）。墓前の許昌県級文物保護単位「徐晃墓」碑（二〇一二年建立）によると、墓は楕円形で高さ約二m、約七〇㎡。墓前には建物の残骸らしき破片が散乱していた。史友仁等によると、漢魏許都故城東北隅に「徐村」があり、当該村名は徐晃の後裔が居住していたことに由来する。徐晃墓は、村の北五〇〇mにあり、現地民は「晃冢」とよぶという。



図37 徐晃墓

一四時一四分、郝慮墓（ $34^{\circ}01'08.5''N$ $114^{\circ}01'58.9''E$ ）に着。墓前には「郝慮墓」碑（二〇一八年建立。許昌市級文物保護単位）、「郝慮墓」碑（二〇一二年建立。許昌県級文物保護単位）がある。高さ三・五m、全周一〇〇m、面積九〇〇



図38 郗慮墓

m。⁹³ 郗慮は献帝期の御史大夫で、献帝と曹操殺害を謀るが、韓浩に密告されて誅殺された。以後、韓氏と郗氏は通婚しなくなったという。⁹⁴ 踏査時、現地はまさに修繕中だった(図38)。文物地図集によれば北面の石墓門は露出していたこと⁹⁵のだが、現在は確認できない。⁹⁵ 郗慮墓のある郗莊村は、郗慮の後裔がこの地に居住したことに由来するという。⁹⁶



図39 毛玠墓

一四時二六分、毛玠墓(34°01'50.8"N 114°01'04.8"E)到着(図39)。墓前の「毛玠墓」碑(二〇一八年建立。許昌市建安区級文物保護單位)によると約七〇〇m。文革中に墓冢は破壊されて耕地化され、銅鏡等が出土したらしいが、⁹⁷『許昌県志(一九八六〜二〇〇〇)』は本墓を「毛丞相墓」とし、保存状態良好とする。⁹⁸ 図39左奥の墳丘が毛玠墓か。馬宝記・杜永青によれば、毛玠は漢魏許都城北部に住み、一帯はのち毛王村とよばれ、毛玠墓もそこにあったという。⁹⁹

一五時二〇分、八龍冢 (34°03'36.9"N 113°50'11.4"E) 到着。八龍工貿集団公司内にあり、産業廃棄物処理場の奥にあって発見しづらかった。墓冢前には全国荀氏子孫祭祖留念「漢荀氏八龍冢」碑(二〇一四年建立)がある。本墓は後漢の朗陵侯相荀淑のもので、荀淑死後に八子が各々柏を植えたことから(図40)、八龍冢・八柏冢とよばれるようになった。墓冢は円形で、高さ約7m、全周約一〇〇m。八龍冢は一九九三年に許昌市級文物保護単位に登録されたが、現地に文物保護碑は見当たらなかった。『許昌県志(一九八六〜二〇〇〇)』によると、八龍冢の西北にはかつて荀淑八子の冢もあったが、現存せず、八龍冢上の柏は七株が残る。馬宝記・杜永青によれば、一九三〇〜四〇年代に三株が破壊され、五株が現存する。

一五時四〇分、王允墓 (34°03'10.4"N 113°49'33.5"E) 到着

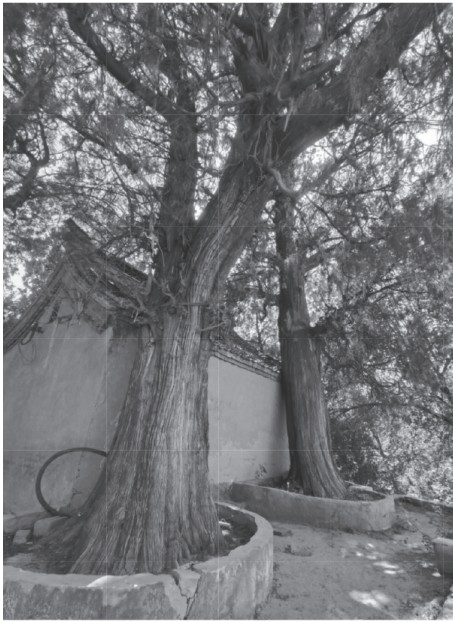


図40 八龍柏

(図41)。墓前には「王允墓」碑(二〇一八年建立。許昌市級文物保護単位)がある。馬宝記等によると、墓冢は高さ約5m、面積約一七六㎡。冢上には元来多くの柏があったが、現在には残らない。献帝遷都時の衣冠冢という。現地解説文によると、二〇一五年に魏都区が王允墓周辺を整備した。なお王允墓は彼の故郷である山西祁県にもあり、馬宝記等は後者を本物とする。

一六時一六分、許昌東駅到着。レンタカー返却。G六九〇(許昌東駅一七時二三分発、二一時〇五分北京西駅着)で北



図41 王允墓

京へ。解散。

注

- (1) 許昌は漢代には許県であり、魏・黃初二年に許昌県に改名された(『三國志』魏書文帝紀)。そのため、本来は時期により呼称を使い分けるべきであるが、本稿では煩雑を避け「許昌」の名称を用いる。
- (2) なお、本邦では実際に許昌を踏査した塩沢裕仁「漢魏の都城、許昌」(『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、二〇一三年)、一六五～二〇七頁)があり、末尾には調査報告も付属している。許昌の都市空間は漢魏許都故城を中心として半径二五キロメートル圏内という(一八四頁)。
- (3) 許昌にある「三國志関連遺跡」は、五〇〇年以上の歴史を持つものだけでも八〇箇所以上あるという。王修武「三國勝迹与許昌旅游業」(『河南省情与統計』一九九五年第七期)、二六頁。
- (4) この点に焦点を当てた研究として、馬宝記・杜永青『許昌三國名勝稽考』(吉林文史出版社、二〇一三年)があり、本稿でも必要に応じて言及する。
- (5) 許昌市文化(文物)局編『許昌文物集萃』(二〇〇七年)、六三頁。
- (6) 張淑霞「許昌漢魏画像磚、石的特点及芸術価値」(『華夏考古』一九九八年第三期)、八七頁。張氏は、董貴人の身分に対し墓室が粗略なのは、誅殺されたためとしている(八七頁)。また史友仁・孟徳然・周進助編著『許昌三國大観』(中州古籍出版社、一九九六年)、八三頁によると、董妃墓を盗掘した際の穴は三箇所あり、一つめは墓冢の西側、二つ目は墓冢の中間、三つ目は墓室にあり、墓頂の磚をめくり墓室に侵入している。
- (7) 国家文物局編『中国文物地圖集 河南分冊』(中国地理出版社、一九九一年)、三三三頁。
- (8) 赫連玉芳『許昌漢画像石芸術』(中州古籍出版社、二〇一四年)によると、許昌博物館は二〇〇件を超える画像石を収蔵している。許昌周辺の画像石は禹州市と襄城県に多く、許昌県や長葛市は比較的少ない。禹州市(漢代の陽翟県)については、司馬徽や徐庶の出身地であり、画像石の多さは経済的・文化的繁栄を示す。
- (9) 甄里「許昌博物館蔵石辟邪的芸術源流考究及賞析」(『収蔵与投資』二〇一三年第八期)、二二頁。
- (10) 許昌市文化(文物)局編注5前掲書、八九頁。
- (11) 許昌市文化(文物)局編注5前掲書、九三頁。春秋楼と許昌文廟の沿革については、甄偉「許昌関宅、文廟歴史沿革与価値探析」(『東方収蔵』二〇一三年第八期)一一三～一一五頁にも詳しい。
- (12) 甄偉氏によれば、「關王辞曹操之図」碑は『三國志』卷三六蜀書関羽伝の「拜書告辭」に依拠しているという(『関王辞曹操之図』碑的歴史淵源及其文化内涵)(『収蔵与投資』二〇一三年第九期)、七二～七三頁)。「關公勒馬挺風図」碑・「關王辞曹操之図」碑の拓本は許昌博物館でも展示されており、所蔵先は瀋陽橋景区内とする。しかし、両碑の拓本は、我々が春秋楼景区内で確認した碑と同一であり、瀋陽橋景区内から一時的に移されているか。一方で、瀋陽橋景区内のホームページによると、許昌博物館の拓本とは異なる民国期の「勒馬挺風」碑も存在しており(URL: http://www.blqjg.com/whgb_read.aspx?pid=2015119165832288 二〇一五年八月一三日閲覧)、或いは許昌博物館の混同かもしれない。
- (13) 王重陽・王芳「許昌春秋楼的歴史沿革」(『文物鑑定与鑑賞』二〇一九年第七期)、四三頁。
- (14) 『許昌県志』編纂委員会編『許昌県志(1986～2000)』中州古籍出版社、二〇〇九年、五二四頁。
- (15) 馬宝記・杜永青注4前掲書、五一頁。塩沢によれば、漢臣が建安二三年(二一八年)に引き起こしたクーデターで丞相長史王必

の「営」を襲撃したこと、曹操は内城に居住していないこと、許昌には「営王村」(外城内)・「議事台」(城外東部)という地名・遺跡が残ることから、曹操の屯営は外城内と城外の二箇所にあったという(塩沢注2前掲論文、一九〇〜一九二頁)。

(16) 馬宝記・杜永青注4前掲書、五六頁。

(17) 許昌市文化(文物)局編注5前掲書、一〇一頁。

(18) 八里橋が灞陵橋に転化した過程について、『三国志平話』・『三国志演義』で西安の灞陵橋の名を借りて関羽の戦いを描写したためとする説と、「八里」と「灞陵」の発音が似ていたため、転訛したとする説がある(張恵涛「許昌灞陵橋関帝廟及其古建築的保護と利用」(『東方収蔵』二〇二四年第六期)、一二三頁)。

(19) 馬宝記・杜永青注4前掲書、一七七頁。

(20) 張恵涛注18前掲論文、一二三頁。

(21) 王小傑によれば、山西商人に由来する許昌・周口関帝廟と比較して、許昌関帝廟は伝説に由来する文化的地盤、地方長官による改修、灞陵橋との密接な関係などの特徴を持つという(王小傑「周口関帝廟与許昌関帝廟の歴史建築之比較」(『美与現代』二〇二三年第三期)、五三〜五六頁)。

(22) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二九頁。なお、夏侯惇墓については衣冠冢とする説もある。王璐艶によれば、夏侯惇の封邑・死地はいずれも許昌ではない。しかし、献帝も衣冠冢が長く居住した許昌にあり、夏侯惇も同様であろうとする(『对于西高穴墓為夏侯惇墓的幾点質疑』(『殷都學刊』二〇一一年第三期)、一三〜一四頁)。

(23) 『(民国)許昌県志』卷一方輿・凶考「附近有三塚。西塚爲蠻王塚、東二塚俗傳、一爲夏侯淵塚、一爲夏侯惇塚。然皆無碑銘、可考」。

(24) 『(嘉靖)雍大記』卷一三夏侯淵墓条に「在涇陽縣西十里蔣村」とあり、こちらの方が文献上の記載は早い。また夏侯淵の戦死地

にもより近いようである。

(25) 許昌市文化(文物)局編注5前掲書、五七頁。

(26) 許昌市民政局編『許昌市地名志』(中州古籍出版社、二〇二三年)、五二七頁。

(27) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八頁。

(28) 許昌市魏都区地方史志編纂委員会編『許昌市魏都区志』中州古籍出版社、二〇一七年、六二二〜六二四頁。

(29) 吳少珉・蘇健・趙金昭主編『河南古跡名勝辭典』(解放軍外語音像像出版社、二〇〇七年)、六一六頁。また本書によれば、本墓は墓門・甬道・前耳室(二つ)・墓室・後耳室(二つ)で構成され、墓室の中の壁画には、侍女や厨房・宴会の様子などが描かれているという。

(30) 『(民国)許昌県志』卷一方輿・墓冢・王霸塚条「在城南樂城保榆林寨南」。

(31) 『(康熙)臨城県志』卷一輿地・漢王霸墓条「在縣東南三里。東西二塚。州距里□□、一實一虛。昔土人墾地、忽穿一空見其□。規模麗。二塚複道相通、隨即掩之。按、恒南一帶乃漢光武當時用兵之處、疑卽二十八將中之王霸也、然不可考矣」。

(32) 『(乾隆)統河南通志』卷一六王霸墓条「在柘城霸岡集霸東漢右將軍」、民国『商水県志』卷一〇祠廟志准陵侯王霸墓条、「在城東五里許黃莊後半里。相傳漢王霸之墓」。ただし、王霸が右將軍となつたことは、伝世文献にみえない。

(33) 河南省文物研究所「襄城県台王遺址試掘簡報」(『中原文物』一九八八年第一期、七〜一三頁)。また別の書籍では「論城遺址」として項目がたっており、様々な呼び名が確認できる(襄城県史志編纂委員会編『襄城県志』中州古籍出版社、一九九三年、五〇二頁)。「(嘉靖)許州志」卷八雜述志論城条に「在襄城東北。蓋曹操行營也、中有論事墓」とあり、こちらの方が早い名称かもしれない。ただし、

- 赫連玉芳氏は論城遺址を練兵台東北の城上村にあるとしており、見解に相違がある（赫連玉芳注8前掲書、一二頁）。
- (34) 史友仁ら編注6前掲書、一〇九頁。
- (35) 襄城県人民政府「台王遺址」（二〇二三年七月一九日公開、二〇二五年六月一六日最終閲覧 URL: <https://www.xiangchengxian.gov.cn/wgxx/021004/021004001/20230724/dd6315a4-a6f4-4c0b-ba9c-b073c3ddd47a.html>）。
- (36) 国家文物局編注7前掲書、八八頁。
- (37) 『嘉靖』襄城県志』卷八附録庵觀祠廟雙廟条に「在化行店」とあり、今の五虎殿が双廟郷化行村にあること、管理人によると明代の創建であることを踏まえると、或いはこの「雙廟」が五虎殿のことを指すのかもしれない。なお、同じく『嘉靖』襄城県志』卷八附録庵觀祠廟に「五虎廟」が霍堰店にあったとあるが、本五虎殿とは位置が異なる。
- (38) 許昌県人民政府地名辦公室編『河南省許昌県地名志』（陝西人民出版社、一九八九年）では、「熊耳山」で項目が立っている（三〇八頁）。
- (39) 許昌市民政局編注26前掲書、一二二頁。
- (40) 国家文物局編注7前掲書、三二五～三二六頁。
- (41) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二五七頁。
- (42) 許昌市文化（文物）局編注5前掲書、五九頁。
- (43) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二五二～二五三頁。
- (44) 李賢『大明一統志』卷一八・直隸徐州華佗墓条に「在州城南。佗以醫顯爲曹操所殺、有碑題曰「後漢名醫華佗之墓」とある。
- (45) 明・祁光宗『関中陵墓志』卷一漢華佗墓条に「今、墓在華陰西五里」とある。なお、同条には「『通志』云華陰人。『後漢書』『三國志』皆曰沛國譙人」とあり、華陰県の華佗墓は『通志』記載の華佗の出身地に由来する。
- (46) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二九頁。
- (47) 馬宝記・杜永青注4前掲書、三一八頁。なお、両氏は賈詡墓が破壊された時期を一九六〇年代としており、保護碑の記述と異なる。
- (48) 赫連玉芳注8前掲書、九三～九四頁。しかし、この説には根拠がないとの指摘もある（田嶋「許昌博物館藏漢画像石墓門画像考釈」『文物天地』二〇二四年第一〇期）、六一頁）。
- (49) 「蔣馬舖」という地名は、曹操が本地に駐屯して馬を養ったことに由来し、もとは「養馬」だったものが音の近い「蔣馬」に変化したという（許昌県人民政府地名辦公室編注38前掲書、二二六頁）。
- (50) 『長葛市志』編纂委員会編『長葛市志』中州古籍出版社、二〇一〇年、五五四頁。
- (51) 鍾繇碑に関する記述は他にも多くあり、例えば南宋・洪適『隸釈』卷二七天下碑録魏鍾繇碑条に「在尉氏縣西北三十里蔣城郷高兼村。今割屬中牟。按、『中牟圖經』云「鍾城在尉氏西北三十五里。有鍾繇古碑、斷折文字磨滅。」、『嘉靖』河南通志』卷四三藝文七碑目鍾繇碑条にも「尉氏」とある。
- (52) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二八四～二八五頁。鍾繇墓に関する記述は、ほかに『太平寰宇記』卷四河南道四偃師原鍾繇墓条に「在縣東八里」、『嘉靖』河南通志』卷一九陵墓河南府鍾繇墓条に「在偃師縣東。繇大傳善書」などがある。鍾会墓については、成都で殺されたため、衣冠冢としている（二八六頁）。
- (53) 長葛県志編纂委員会編『長葛県志』（生活・読書・新知三聯書店、一九九二年）、五六二頁。
- (54) 宋萌萌『左伝』長葛邑地理望』（『中原地方誌』二〇二〇年第二期）、一一三～一一四頁。なお、宋氏は十二連城を戦国魏によるものとするが、注6前掲『中国文物地図集 河南分冊』では戦国韓のものとする（三二五頁）。
- (55) 長葛県志編纂委員会編注53前掲書、五六三頁。なお、『長葛県志』

では、張遼墓とする真実性は待考としている。

- (56) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八頁。なお、『中国文物地図集 河南分冊』では、本墓の面積を 1370m^2 とし(国家文物局編注7前掲書、三一五頁)、文物保護碑の解説文も約 1300m^2 とする。
- (57) 許昌県人民政府地名辦公室編注38前掲書では、「劉莊」の由来を墓守の姓とするが、伏皇后墓には触れていない(二一七頁)。
- (58) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二二七頁。伏皇后墓の石墓門は、張淑霞注6前掲論文、八六頁に画像がある。
- (59) 国家文物局編注7前掲書、三二五頁。『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書では、高さ八m、面積三畝としており、本来はより大きかったのだろう(五二八頁)。
- (60) 村民がサツマイモを貯蔵する穴を掘っている際に、墓門が開いた(史友仁等編注6前掲書、一〇五頁)。
- (61) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八～五二九頁。
- (62) 面積については、五畝とする説もあれば(史友仁等編注6前掲書、一〇八頁)、二〇畝とする説もある(馬宝記・杜永青注4前掲書、一三〇頁)。時代によるのだろうか。
- (63) 馬宝記・杜永青注4前掲書、一二九～一三〇頁。
- (64) 馬宝記・杜永青注4前掲書、一三〇～一三一頁。
- (65) 文物保護碑の解説文では、「受禪表」碑が高さ 3.22m 、幅 1.02m 、厚さ 0.28m 、「公卿上尊号奏」碑が高さ 3.33m 、幅 1.02m 、厚さ 0.32m とある。
- (66) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五三〇頁。
- (67) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五三〇頁。
- (68) 塩沢注2前掲論文、一九二頁。
- (69) 曹氏家廟は曹操自ら場所の選定をし、建設計画を立てたものという伝承がある(史友仁等編注6前掲書、一八四～一八五頁)。
- (70) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五三〇頁。
- (71) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八頁。
- (72) 許昌市魏都区地方史志編纂委員会編注28前掲書、一三三頁。
- (73) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五三〇頁。
- (74) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二〇七頁。なお本書では年代が一六八四年となっているが、明滅亡後のため誤植であろう。
- (75) 「張公祠」碑(許昌市級)の解説文は、創建年代を不明としている。
- (76) 国家文物局編注7前掲書、三一七頁。
- (77) 『嘉靖』許州志』卷八雜述志廟宇・張飛廟条「在古城西。傳飛嘗守此故祀之」によれば、張飛が当地を守備したとの伝承があった。
- (78) 史友仁等編注6前掲書、三九～四〇頁。「張公祠」碑(許昌市級)の解説文によると、現地民が本祠に拠って匪賊から逃れ、殿内に包公像があったため、包公寨ともよばれるようになったとする。また山門前解説文によると、張公祠の山門は、寨や洞門として用いられ、多くの漢碑や明清期の碑が使用されているとか。
- (79) 史友仁ら編注6前掲書、四〇～四一頁。
- (80) 漢魏許都故城は張潘故城とも呼ばれ、『中国文物地図集 河南分冊』は「張潘故城」の名で項目を立てている(国家文物局編注7前掲書、三一五頁)。
- (81) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八頁。
- (82) 趙西堯等『三国文化概覽』(河南大学出版社、一九九三年)、三七頁。
- (83) 許昌市文化(文物)局編注5前掲書、三七頁。なお、塩沢氏は許昌遷都く晋代まで許昌県治に潁川郡治があったとする(塩沢注2前掲論文、一七一～一七二頁)。
- (84) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二四頁。
- (85) 馬宝記・杜永青注4前掲書、六頁。貨幣については黄留春が論じており、曹魏の五銖銭は董卓期のものを踏襲しているという(浅

識漢魏許都故城窖藏銅錢」『中国錢幣』一九九二年第二期、三〇―三五頁。黄氏は銅印についても論じており、故城西南の董村で発見された「奉車都尉」印など四つの銅印は、河北内丘で出土した曹魏期の「武猛校尉」印と形が類似し、出土地からみても魏晋期のものとする（黄留春・黄曉麗「漢魏許都故城遺址出土的四方銅印」『文物』二〇〇四年第四期、九二頁）。

(86) 現地解説文は面積五〇〇㎡とし、史友仁氏等編注6前掲書は面積約四〇〇㎡とする（二七頁）。

(87) 許昌市地方史志編纂委員会編『許昌市志一九八八―二〇〇〇』（中古古籍出版社、二〇一八年）、一一七二頁。なお、「毓秀台」の名称は一九七〇年代に初出し、後漢末三国期の名称は「永始台」であったとする説がある（馬宝記・杜永青注4前掲書、二八頁）。

(88) 史友仁等編注6前掲書、二七頁。

(89) 塩沢注2前掲論文、一七八―一七九頁。

(90) 賈慶申「漢魏許昌宮景福殿基址考辨」（『許昌師專學報（社会科学版）』一九九三年第三期）、九六―九七頁。ただし、塩沢氏は待考としている（塩沢注2前掲論文、一七九頁）。

(91) 史友仁等編注5前掲書、三八頁。

(92) 現地解説文・馬宝記・杜永青注4前掲書は高さ5mとする（三〇五頁）。

(93) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二九頁。

(94) 史友仁等編注6前掲書、四八頁。『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書では鄭姓としている（五二九頁）。

(95) 国家文物局編注7前掲書、三一六頁。

(96) 史友仁等編注6前掲書、四八頁。

(97) 国家文物局編注7前掲書、三一六頁。

(98) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二九頁。

(99) 馬宝記・杜永青注4前掲書、三一二頁。

(100) 許昌市地方史志編纂委員会編注87前掲書、一一七五頁。

(101) 『許昌県志』編纂委員会編注14前掲書、五二八頁。

(102) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二二二頁。

(103) 現地解説文は、一本残るとする。

(104) 馬宝記・杜永青注4前掲書、二二二―二四二頁。

(105) 『後漢書』卷六六王允列伝に「後遷都於許、帝思允忠節、使改殯葬之、遣虎賁中郎將奉策弔祭、賜東園祕器、贈以本官印綬、送還本郡」とあることから、出身地の墓葬が本物であるという（馬宝記・杜永青注4前掲書、二二六―二四三頁）。

〔付記〕本稿は柿沼陽平のJSPS科研費（24K04293）による成果の一部である。

柿沼陽平（早稲田大学文学学術院教授）

王博（中国社会科学院古代史研究所助理研究員）

鮫島玄樹（早稲田大学文学研究科博士後期課程）

平林優一（早稲田大学文学研究科博士後期課程／北京大学高級進修生）

『史滴』論文投稿規定（雑誌掲載）

- 一. 投稿資格は早稲田大学東洋史懇話会会員に限ります。
- 二. 原稿枚数は、本論・注・地図などあわせて四〇〇字詰め原稿用紙八〇枚以内とし、和文要旨（一二〇〇字以内）、英文タイトル、英文氏名、執筆者紹介資料を添え、ご提出下さい。
- 三. 本誌は一頁二段組で、一頁あたり五四字×二三行、一二四二字（四〇〇字詰め原稿用紙三枚）として換算いたします。また、図版は一段あたり原稿用紙一.五枚として換算しております。
- 四. 原稿のご提出にあたりましては、打ち出し原稿とデータを添え、本会宛にご郵送下さい。
- 五. 提出原稿の執筆に際しては、必ず執筆要領の規定に従って下さい。同要領は請求次第、送呈いたします。
- 六. 締切期日は七月末日とします。査読委員による審査をへて掲載を決定いたします。

〈複写される方へ〉

〈複製される方へ〉

早稲田大学東洋史懇話会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。

当該利用をご希望の方は、（社）学術著作権協会（<https://www.jaacc.org/>）が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

〈How to Obtain Permission〉

Waseda University Toyoshi-Konwakai authorized Japan Academic Association For Copyright Clearance (JAC) to license our reproduction rights, reuse rights and AI ML rights of copyrighted works. If you wish to obtain permissions of these rights in the countries or regions outside Japan, please refer to the homepage of JAC (<http://www.jaacc.org/en/>) and confirm appropriate organizations to request permission.

史
滴

第
四
十
七
号

2025年12月20日印刷 2025年12月30日発行
編集兼発行 早稲田大学東洋史懇話会
印刷所 富士リプロ株式会社
〒101-0048 千代田区神田司町2-14
発行所 早稲田大学文学部アジア史コース室
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1
URL <https://dpt-bun-tousi.w.wasedaa.jp/konwa/>
E-mail: wkonwakai@gmail.com